アラン・プリバエフ／広島晋、田野倉雅秋（vn）

ユーリ・バシュメット（指揮&va）／モスクワ・ソロイスツ合奏団、樫本大進（vn）

オーケストラ　ユーリ・バシュメット（指揮&va）&モスクワ・ソロイスツ合奏団

6月5日・東京オペラシティ●樫本大進（vn）●シュニトケ（バシュメット編）「室内オーケストラのためのトリオ・ソナタ」、シューベルト（クルーゲ&パラショフ編）《アルペジオーネ・ソナタ》（管弦楽伴奏版）●モーツァルト「協奏交響曲」K364

当代きってのヴィオラ奏者ユーリ・バシュメットが20余年前に創設したモスクワ・ソロイスツ合奏団（常設メンバー24名）は、今回もバロックから古典、ロマン派を経て近現代に至る数種のプログラムを携えて公演を行った。当夜のそれは、シュニトケ（バシュメット編）「室内オーケストラのためのトリオ・ソナタ」、シューベルト（クルーゲ&パラショフ編）《アルペジオーネ・ソナタ》、モーツァルト「ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲」というもの。シュニトケの作品は神秘的かつ表現主義的な性格と旋律的な叙情性とを綯いまぜにして、なかなかに聴かせる。シューベルトは、昔、G・カサドによる彼自編のオケ伴版が録音されていたが、今回のはそれとは別。ピアノ伴奏による同曲の名演CDを持つバシュメットが、ここでは立ってヴィオラを奏しながらの弾き振り、心ゆくまで〝歌って〟聴かせた。モーツァルトは樫本大進を迎え、行き届いた豪華な弦の競演を楽しませた。アンコールはバシュメットの60歳を記念し、大進指揮による《ハッピー・バースデイ》の変奏。　●濱田滋郎

オーケストラ　セントラル愛知交響楽団 特別演奏会「高田三郎誕生100年記念」

6月29日・三井住友海上しらかわホール●齊藤一郎（指揮）、石川祐支（vc）●信時潔：絃楽四部合奏（1920）、新実徳英「管弦楽組曲《森は踊る》～世界の子どもたちへ～」（2003）、高田三郎「狂詩曲第1番」「同第2番」、安部幸明「チェロ協奏曲」（1938）

愛知県出身の高田三郎はその合唱曲で広く知られる存在であるが、その原点は管弦楽曲であるという。その曲に先立って、高田の師匠である信時作品が演奏された。この曲は4本の弦楽器の旋律線が骨太で主張が強く、それでいて全体の調和度が高い。スタイルとしては素朴で古い印象だが、それだけに伝わる力がある楽曲である。転調や動機操作の手法を実直に使いこなし、独特の現代性をも獲得しているとも言える。演奏も共感度の高いものだった。新実作品はさすがに新しく、オーケストラの語法を巧みに消化し発展した作品。それだけに効果の高い音響が展開して飽きさせなかった。高田の作品は初演の当時は空襲でスコアを消失したものを後に作曲者自身が再編し、2011年に東京で再演された。その名古屋再演である。「木曽節」「追分」をテーマにした新鮮な躍動感に満ちた楽曲をその生命感を活かした演奏となったのは、齊藤の熱意の高さによるものであろう。安部作品のチェリスト、石川の渾身の熱演が光った。新たな曲で室内楽的な綿密さを表すのは困難だが、よくクリアーしていた。資料的価値が高いばかりではない、熱意が伝わる演奏会である。　●渡辺　康

オーケストラ　広島交響楽団（第330回）

6月7日・広島文化学園HBGホール●アラン・プリバエフ（指揮）、田野倉雅秋（vn）●ブラームス「ヴァイオリン協奏曲」、ラフマニノフ《交響的舞曲》

田野倉のヴァイオリン独奏は、柔らかく艶のある音色自体に魅力があり、テンポの揺れで深い味わいを醸し出していた。彼は、広響のコンサートマスターを務めているだけあって縦の線がよく揃う。内面的にも充実した質の高い演奏を展開した。第2楽章のゆったりとした部分のたっぷり歌う表情の豊かさは、風格さえ漂うものだった。第3楽章は、微妙なルバートやフレーズの収め方が巧みであるだけでなく、音楽を引き締める力もあり実に上手くまとめたと言える。高度な技術力が求められる曲でもあるのだが、全く困難さを感じさせない彼のテクニックも見事なものだった。

《交響的舞曲》の第1楽章は、アルトサクソフォーンの柔らかでどこか懐かしい音色が効果的で、リズムや調性の変化も丁寧に表現していた。第2楽章は、トランペットのミュートした音色で始まる暗いワルツの絶望的な表情に、独特な雰囲気があった。第3楽章は死の舞踏的な始まりから反復されて伝わる切なさの表情も優れたもので、フィナーレのなだれ込むような進行とうつろな響きも魅力的だった。　●日比野章彦

オーケストラ　東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団（第270回）

6月8日・東京オペラシティ●宮本文昭（指揮）、秦茂子（S）、加納悦子（Ms）、福井敬（T）、河野克典（Br）、東京シティ・フィル・コーア●ヴェルディ「レクイエム」

音楽監督・宮本文昭の指揮でヴェルディの「レクイエム」。東京シティ・フィル・コーアも参加して、この日のオーケストラからは、まさに東京シティ・フィルの総力を結集した、特別な音が聴こえてきた。宮本は全身全霊で音を引き出そうとしていた。その熱や強音は、まさにヴェルディの音楽にふさわしい。

独唱陣では、若手の秦茂子の健闘が光る。声の芯の強さのあるソプラノ。最後まで美声を保っていたのは見事。ただし、「リベラ・メ」でもう少しオペラ的な表現力があればとも思った。まだ若いだけに、様々な表現力を身につけてほしい。メゾソプラノの加納悦子は全曲にわたって充実した歌唱を聴かせてくれた。テノールの福井敬は、威力があり、独唱陣の中でも際立っていた。日本人歌手では稀有な存在である。バリトンの河野克典は味わい深い。東京シティ・フィル・コーア（合唱指揮：藤丸崇浩）は、宮本の指揮のもと、真摯で迫力のある合唱を聴かせてくれた。ただし、響きが些か平板に感じられるところがあり、もう少し深みがほしいとも思った。　●山田治生

オーケストラ　東京ニュー・シティ管弦楽団（第88回）

6月8日・東京芸術劇場●内藤彰（指揮）、東京合唱協会●ワーグナー《タンホイザー》より「序曲、巡礼の合唱～終幕の合唱」、《さまよえるオランダ人》より「序曲、糸紡ぎの歌」、《ローエングリン》より「第3幕への前奏曲～結婚行進曲」、ヴェルディ《シチリア島の夕べの祈り》序曲、《ナブッコ》より「行け黄金の翼に乗って」、《マクベス》より「虐げられた祖国」、《アイーダ》より「凱旋の合唱～行進曲～バレエ音楽エジプトとイシスの神に栄えあれ」、《椿姫》第1幕第1場より

ワーグナーとヴェルディ生誕200年の今年、最高の贈り物の1つとなったのがこの定期。名場面のプログラミングもさることながら、フアンファーレの配置、そして、舞踏会さながらにドレスアップしたコーラスなどの演出が次々と繰り出され、心行くまで楽しめるステージだった。

フィリップ・ヘレヴェッヘ／読売日響

大植英次／東京フィル

前半のワーグナー、幕開けの《タンホイザー》序曲」から、その音色には神秘的なヴェールがかかっている。管の響きが溶解した冒頭の「巡礼の合唱」、音量を抑制し切った弦に続き幻想的音色で立ち現れるトロンボーン。《さまよえるオランダ人》や《ローエングリン》の序曲においても、指揮の内藤彰はオケから、和声の変幻においていかにワーグナーが色彩変化に腐心したかを如実に浮かび上がらせ、シェーンベルクの音色旋律への感覚すらも感じられる塑像だった。

後半のヴェルディには、合唱や舞台となった場面の楽しさを満喫させる演出が一杯。《椿姫》「乾杯の歌」では色とりどりのドレスに身を包んだ合唱団が華やかに、そして力強い歌声でステージを彩り、心躍る一時をプレゼントされた思い。東京合唱協会、畠野淳（Br）、國光とも子（S）、古市尚子（A）。　●小倉多美子

オーケストラ　東京フィルハーモニー交響楽団（第834回）

6月9日・オーチャードホール●大植英次（指揮）●山田耕筰「序曲」「長調」、バーンスタイン《ミュージカル・トースト（音楽で乾杯）》「《キャンディード》組曲」（ハーモン編）、ベートーヴェン「交響曲第7番」

2日前に同じ東京フィルを指揮したチャイコフスキー他の作品ではかなり誇張の強い表現を採っていた大植もこの日は一転、直截なダイナミズムで躍動し沸騰するエネルギー性豊かな演奏をつくり出した。バーンスタインの2作品では燃え立つような勢いのいいリズム感が爽快を極め、特にハーモン編「《キャンディード》組曲」は大植とミネソタ管に献呈された作品ということもあって、指揮者の全身全霊を込めた熱狂的な演奏となった。ベートーヴェンの「第7番」では、第4楽章のリズム動機提起の際にその都度長い間を取る解釈が若干くどさを感じさせたものの、全体としてはストレートな力感を基盤とした演奏で、快い印象を残す。この曲はバーンスタインが生前最後に指揮した曲でもあり、師の遺品の上着を譲り受け着用して指揮台に立った大植としては、師への祈りをこめた指揮というべきものでもあったろう。

山田耕筰の小品は1912年の作で、ドイツ初期ロマン派の影響（特にウェーバー）の影響が著しく、非常に興味深い。東京フィルはこの日も燃焼の演奏であった。　●東条碩夫

オーケストラ　日本センチュリー交響楽団（第182回）

6月13日・ザ・シンフォニーホール●アラン・プリバエフ（指揮）、ヴィヴィアン・ハーグナー（vn）●ラヴェル《クープランの墓》、モーツァルト「ヴァイオリン協奏曲第3番」、ボロディン「交響曲第2番」

ラヴェルではまず木管が色彩感豊かに曲想をリード、純化した弦がそれに呼応、融合しながらバロック的な雰囲気を巧みに構成。現代的な音の流れの中に何かを懐旧するような世界が作り出された。続くモーツァルトではハーグナーの知的なソロが独特の耀きを引き出した。オケもその耀きを増幅するように的確にバック・アップする。特に第2楽章でハーグナーは思索的な沈潜の中にそこはかとない翳りを投入、オケの木管がそれをクローズ・アップするように絡み合って曲想の深みを提示した。哀しみを秘めた美しさだ。

後半のボロディンもプリバエフの持ち味を遺憾なく発揮した曲。第1楽章冒頭の主題がすでに独特の響きを内包していた。これに主導されて形で限りなく優しい第2主題が見事な対比を作り出したし、第2楽章では渾沌とした金管の重奏の中に民族的な激しい情熱の迸りが描き出された。第3楽章と終楽章を彩った民謡あるいは民族舞曲的な響きは全体の流れを物語的に展開するような説得力のある内容に構成されていた。プリバエフはこの楽団とこれまでにも何度か好演を積み重ねているが、今回も実に印象的な名演である。　●嶋田邦雄

オーケストラ　オーケストラ・アンサンブル金沢（第338回）

6月13日・石川県立音楽堂●レオン・フライシャー（指揮&p）、キャサリン・ジェイコブソン=フライシャー（p）●ラヴェル《クープランの墓》、モーツアルト「2台のピアノのための協奏曲」K242、ベートーヴェン「交響曲第1番」

前半と後半に、それぞれ頂上がある人生は、起伏の眺めだ。2つの頂上は「奇蹟」を挟んで見事な対照を見せる。活動初期は荒削りピアニスト。突如、右手の自由を奪われ、左手のピアニストや指揮者として数十年。そして奇跡の治療効果で再び両手のピアニストとして蘇り、80代での山頂。

この日、その山頂の眺めを堪能させたL・フライシャーの芸格は、聴くたびに透明感を増している。

ラヴェルの楽譜から、慈しむように音を取り出して清爽。娑婆っ気が綺麗に抜け、淡々とした語り口に、微かな香りが混じる。その微かさが精妙なのだ。

モーツアルトでのキャサリン夫人とのデュオは、相似形と個性が頃合いに共存する絶妙の呼吸。

ベートーヴェンでは、充分に音を保った冒頭から演奏の性格が明瞭に現れる。音の構造が鮮烈に示され、しかも流れが自然。だから縦と横の線が極めて円滑に結ばれる。気品の至芸。　●響　敏也

オーケストラ　読売日本交響楽団

6月16日・サントリーホール●フィリップ・ヘレヴェッヘ（指揮）●ベートーヴェン「序曲《コリオラン》」「交響曲第1番」「交響曲第7番」

日本の交響楽団がピリオド楽器系指揮者と共演するケースが増えている。今回読響が招いたのは、コレギウム・ヴォカーレ&シャンゼリゼ管と来日中のヘレヴェッヘ。オール・ベートーヴェン・プログラムである。ヘレヴェッヘはノン・ヴィブラートやナチュラル管の金管や堅いバチなどで「古楽らしさ」を求めることはしない。《コリオラン》序曲」は不協和音を強調し、控えめなヴィブラートで和声の色合いを際立たせ、所々思わぬところで内声を浮かび上がらせる。続いてベートーヴェンの「交響曲第1番」と「同第7番」。ともに急楽章は総じてかなりのアップテンポだがフレーズを終りまできっちりと弾く。アーティキュレーションやイントネーションなど、バロックの音楽修辞学に通じる、「音楽による語り」への拘りと整えられたフレージングによる対位法の美しさは、ヘレヴェッヘの美質だろう。それが最もよく生かされていたのは「第1番」なら第2楽章、「第7番」は第2、4楽章。したがって「第7番」は陶酔と野趣のバッカスの祭典ではなく、情熱的ながらも古典的な調和と気品に満ちたものだった。　●那須田　務